

中国の政治の流れと今後

井 尻 秀 憲

激動する中国の不透明さ

「中国の政治の流れと今後」というテーマをあたえられましたが、現在中国の政治がひとつの大きな旋回期にあり、より深い意味での中国の政治の流れ(潮流)がどういった方向にあるのか、そうした方向性はいつごろからどのような方向に起ってきたのかを考えると、重要なことではないかと思えます。

ここ一年ぐらいの経緯をみましても、中国は「北京政変」から「四人組」批判、そしてついせんだての鄧小平復活から十一全大会の開催といった、まさに激動の一年を経過してきております。そうしたなかで、最近の中国というのはいったいどうなっているのだという疑問がわいてきています。日本人一般のなかにもそうであるし、また中国の民衆自身も、トップ・リーダーたちの政治のやり方にたいしてかなりの疑問を抱いているのではないかと気がするわけです。

今回の「四人組」批判にあらわれている一連の政治的現象をながめてみますと、ひとつは四人組時代というものを徹底的に批判することでもって、それに対応すべき華国鋒時代を評価すること、そしてそこに正統性を見い出そうという、そうした現実があります。そ

こにはある意味では、「四人組時代はひどかった」という、そうした言葉でもってすべてを押し流してしまおうような政治の傾向があるともいうことができましよう。

では果して「四人組」時代というのはどういったものであったのか。あるいはそれ以前の、少なくとも文化大革命以降の中国の政治の流れというのはどういうものであったのか。そうした点をもう少し具体的な歴史的事実に沿って考えてみないと、現在の華国鋒時代そのものについての考察も不可解なものになってしまいます。そうした問題を煮つめていきますと、そもそも「四人組」というのはどのように抬頭してきたのか、あるいは毛沢東夫人であった江青が、今日あいつた形で失脚するということはどういうことなのか。それから「四人組」の失脚は中国にとって第二の解放といわれるわけですが、ではその「四人組時代」というものを、文革以後の毛沢東体制の一貫としてみるならば、そうした「四人組」からの解放こそ、毛沢東政治が内包させてきた政治的矛盾点からの解放だとも考えられるわけで、そこからある意味では毛沢東体制への批判といった見方もでてくるわけがあります。

また、華国鋒体制は、「四人組」を失脚させることによって、さ

まを熟知し、そこでの中国側の意図を十分察知したうえで日本のとるべき対応を考えていく必要があるでしょう。現在の日中関係において、すでに国交樹立後五年もたっているのに平和友好条約すら結べないのは遺憾であるとか、条約締結の機はずでに熟した、といわれ、日本政府の外交に積極性がないことを憂うる見解が出ておりますが、これは必ずしもそうではない。むしろ十分な議論を尽さず、時流にのっかってただ惰性的に外交をおこなうことを憂うるべきであり、ましてや国会批准を必要とする条約を、「機は熟した」の一言でもって簡単に結んでよいというものではありません。また、中国側のいうように福田首相の一秒の決断で解決がつく白物でもないでしょう。ここではむしろ、何にもまして日本側のナン・ナル・インタレスト、ソ連敵視ととられても仕方のない「覇権条項」を含む条約を結んで日ソ関係を悪化させ、必然的に日本が中ソ対立に巻き込まれていってまで条約締結を促進しなければならない日本側の利益は何なのかという点について、十分理解されなければならないわけでは

の問題にかんして今こそ本格的に動き出す構えをみせておりますが、中国との交渉に際しては、「覇権条項」が第三国敵視を意味しないとの文言を付すなど、具体的かつきめ細かな対応策を練る必要があります。

中国の外交が内政によってより多く規制される点についてはさきに述べましたが、今後の中国が鄧小平ら現実主義的指導者によってリードされることになればなるほど、その外交は一見対外的に柔軟なようでありながら、実はきわめて手ごわいものとなるわけで日本政府の交渉能力もその点でふたたび問われることになると思われるのであります。

その意味では、昨年、『正論』十一月号において外務省の法眼晋作氏と東京外語大の中嶋健輔氏が論じ、日中平和友好条約に近くしてかなり激烈な討論をおこなっておりますが、この問題の論点はあの場でほぼ出尽くしており、ここにいたってようやく国民の前で論理が整理されたように思われます。そして、そうした議論が十分なされ、政府としてもそれらの問題を十分把握したうえで政策を進めていくのであれば、おのずとそこに道は開かれてまいりますし、具体的な対応策も浮かびあがってくると思われま

(註) 昨年十一月本会「青年の会」研究会における若手研究者の講話記録です。今後は若手、新進の研究者の論文を随時取上げてまいりますのでご叱正、ご批判を賜われれば幸いです。

(東京外語大大学院地域研究研究科)